様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 ２０ 日現在

機関番号：１３３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０５４７

研究課題名（和文）Spoken languageの文法論に向けた英語表現におけるタグの研究

研究課題名（英文）Toward the grammar of spoken language - tags in the English language

研究代表者
澤田　茂保（Sawada, Shigeyasu）

金沢大学・外国語教育研究センター・教授

研究者番号：００１９６３２０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　600,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、話しことばの文法論の構築を目的にして、話しことばに広く観察されるタグの表現を研究したものである。学校文法では構文の付加物として扱われていたタグについて、独自の存在意義を持つものと考え、具体的には、英語のラジオドラマの分析をおこなって、四つの伝統的なタグに応答のタグを加えて、5つのタグ表現について理論的な考察を行った。
　英語のspoken languageに観察される様々なタグの形式について、web上で学習できる教材を作成した。また、タグの研究について、研究の成果を広い読者、例えば、高校の英語教師や英語を専攻する学生、を対象に還元できるように、4月に出版された学術書の中に収めた。

研究成果の概要（英文）：This project is an attempt to advance a theory of tag expressions with the aim of constructing a grammar of spoken language. Although tags are observed in a wide range of spoken English, school grammar has unfortunately been treating them as an appendage to main clauses, as easily recognized by its very name. Having analyzed an amount of utterances or lines used in a certain series of radio dramas, I have tried to investigate the patterns of various types of tags, which are basically subcategorized into four: question tags, command tags, exclamatory tags, and statement tags. I have added response tags to the categorization of tags.
Based on the results obtained from the research, I have made up an online learning material that helps English learners understand the nature of tags, and incorporated the results of this project into one of the chapters in the academic publication published in April, 2016.

研究分野：英語学

キーワード：spoken language　tags

１．研究開始当初の背景

本研究は平成 21 年度に始まった教員免許更新講習を担当した経験を背景にしている。当時文科省から「講習内容に関する基準」が示されており、教科教育に関して「…指導の背景となる専門的知見…について最新の内容を取り扱うこと」とあった。中学・高校の現職英語教員の日々の教育活動に資する「最新の内容」は何か、と考えたときに、申請者が担当した「文法教育」では現在の英語教育の目標である≪実践的なコミュニケーション能力の養成≫に沿った新しい文法観を示すことであると思った。英語教員の多くは、自らが大学時代に学んだ文法とコミュニケーションの時代の文法との間にズレを直感しており、結果として、英語学習における文法の軽視（話すなら文法は要らない）につながっている、と私は感じていた。文法教育のない外国語教育は存在しない。問題の所在は、written language に根拠を置いた文法を無批判に spoken language の教育に適用しようとするところにあると思われた。

そして、平成 21 年の教員免許更新講習の担当経験を踏まえて、spoken language について基礎的な研究を行うこととし科研費を申請した（研究課題名：「新しい文法教育のためのリアル・タイムと場面の制約がある言語形式の基礎的研究」、以下「新しい文法教育の基礎研究」と称す）。同研究最終年度に『学習英文法を見直す』というテーマで開かれた第 8 回英語語法文法セミナー(英語語法文法学会主催)に講師として招かれた。主催者から同セミナーは中高英語科教員や英語教員を目指す学生も対象にしている、と聞いていたので、spoken language の実態分析を基にした新しい文法の方向性を示すことにした。話し手と聞き手が存在する場面においてリアル・タイムで進行する英語発話の特徴として、「場面に密着した表現の定型化」、「状況省略」、「(モダリティとしての)強調の形式」、「構造の平板化」に加えて、「タグの表現」について項目を立てて触れた。そして、spoken language の分析にはタグ形式を統一的に理解する枠組みが必要であることを述べておいた。

セミナーにおいて spoken language の文法論の概略を示すことはできたと思いながらも、個々の項目について、さらに深く踏み込んだ考察が必要であると感じた。このような経緯から、「新しい文法教育の基礎研究」を深化・発展させるべく、中でも理解が遅れているタグの研究を行った。以上が本研究の背景である。

２．研究の目的

実際のところ、タグについては、英語学において明確な定義がない。本研究で「タグ」と呼ぶ言語形式について簡単に説明したい。基本的に、代名詞と第一助動詞から成る断片的な形式で、例えば、単純な応答である“Yes, it is.”の“it is”、付加疑問文の“John likes his job, doesn't he?”の“doesn't he”、さらに感嘆文の“How beautiful she is!”の“she is”などが本研究での「タグ」である。これらは中学レベルの英語で出現する形式であるが、教育上ではバラバラに導入されて、学習項目間で横断的な視点がない存在である。誤解を恐れずに言えば、それぞれの文型指導で「こういうもんなんだよ」と言うだけであった、といえる。

実は、タグは、初級レベルでの出現にとどまらず、対面状況のコミュニケーションでは様々な機能を担って広範囲に現れる。上述の応答形・付加疑問文・感嘆文でタグの形式が出現するのは、偶然ではなく、これらの文型が使用される典型的な場面が対面状況でのコミュニケーションだからである。タグは様々な使用場面で個別的には認識されているが、単純な「文断片」のために、国内の主流的な英語学(あるいは英語教育)では考察の対象となることはなく、それ故、多様な現れを一元的にとらえる視点はなかった。

他方で、海外の研究に目を向けても、本研究が目指すようなタグの一元的・包括的な視点に立った研究はない。まず、英文法の金字塔といってもよい Quirk et al.(1985)においてすら、タグの記述は分断的で、数多くの記述項目に散在し、その多くは注記として触れられているに過ぎない。この時代まだ spoken language というもの自体を研究対象とせず、spoken form には informal というレッテルが張られていたからである。その後、コンピュータの発達で音声言語の大規模データベースが可能になって、ようやく spoken language の構造的な特徴が少しずつ論じられるようになった。その嚆矢である Biber et al. (1999)は、Quirk et al. (1985)の影響を受けながらも、spoken language のデータを分析対象としている。しかし、そこでは、タグ(tag)は節に後続する要素の総称として使われており、例えば、生成文法で言う「右方転移」要素なども tag に入れている。そして、Carter and McCarthy (2006)(以下、C&M)では、本研究の意味のタグに近い記述があり、tag を節の断片として分類している。しかし、ここでも、例えば、応答のタグなどは別のものとして取り上げられて、同じタグの形式であるにもかかわらず、一元的・統一的な視点に立っているわけではない。

本研究の目的は、こういった過去の研究でバラバラに扱われていたタグを統一的に扱い、その働きについて考察することである、

３．研究の方法

研究の方法の概要は、対面状況で発話される適切な英語素材を分析の対象として選び、

本研究で呼ぶ「タグ」の形式をその使用状況(=コンテキスト)ともに抽出・分析して、形式に配慮しつつ語用論的な多様性を分類・整理すること、また、出現していない事例について母語話者インフォマントへのインタビュー調査を実施し、タグ全般について統一的な枠組みの中で理解すること、そして、その成果に基づいて、タグが理解できる簡単な教材を作成することである。具体的には、「新しい文法教育の基礎研究」で作成したラジオ・ドラマ・コーパスを拡大・分析して、所属大学の母語話者教員にインタビュー調査などの協力を得て、オンラインでタグについて学ぶ教材を作成した。

上記の研究方法の概要に関連して以下の事柄について述べる。

まず、適切な英語素材の選択についてである。「新しい文法教育の基礎研究」で利用した英語ラジオ・ドラマの素材を分析対象とした。ラジオ・ドラマを選ぶ理由は、使用コンテクストが音調とともに比較的はっきり分かるからである。本研究が対象とするタグは、形式が単純なために音調やコンテクストに依存する度合いが高い。そのため、コンテクストから切り離した形で事例を作って議論することは不可能で、できるだけ現実の英語使用に近い authentic な素材を利用する必要がある。なお、この点から言えば、本来は母語話者が対面状況で自然に発話している音声を資料とするのが一番よいのかも知れないが、日本国内ではそのような英語音声素材を大規模に収集することが難しいので採用しなかった。

ラジオ・ドラマには台本があり、自然に発話したものではない、という批判があろう。しかし、「新しい文法教育の基礎研究」で種々の英語素材から音声を起こし経験から、タグの研究にはラジオ・ドラマが一番適切であると思った。その理由は、タグの機能は、話し手の気持ちや微妙な心理の表出に関わっているので、そのような働きは現実の場面では非言語的な手段で担われる場合が多い。ところがラジオは視覚情報がない。故に、ストーリーに関わる意味表出はすべて発話を通じて行われる。従って、ラジオ・ドラマはタグの宝庫なのである。他方、例えば、視覚情報のある映画ではタグは少ない。なぜなら、登場人物の微妙な心理は表情や仕草など役者の演技の中で表出される方が映画として価値が高いからである。

次に、タグの形式と語用面の分析・分類の方向性についてである。先行研究では、C&M が、不十分ながらも、タグを節構造の一形態としてとりあげて、疑問のタグ、命令のタグ、陳述のタグ、感嘆のタグの四つの分類をあげている。しかし、C&M では、節構造の一形態としてタグを位置づけているために、対面状況で進む発話で広く観察される応答のタグをタグ分類に入れていない。そのため、「タグの形式」の働きの広がりがとらえられていない。本研究では、C&M の四分類を元に、節断片のタグの関係性を解明し、さらに対面状況の応答のタグを加えて、対面で進行するコミュニケーションでタグがどのような理由で成立し、どのような働きを担っているかといった観点から考察した。

具体的な方法としては、アメリカのラジオドラマの Twilight Zone シリーズのエピソード（１エピソード 45 分程度）の 20 エピソード程度を音声起こしして、スクリプトの確認を母語話者に依頼して、データベースを作成した。次に、その中に存在する様々なタグ表現を分析整理して、母語話者に対して、使用される場面とその意味について聞き取り調査を行い、それをもとに該当するタグが含まれる対話モデルを作成した。

最後に、母語話者インフォマントへのインタビュー調査の必要性について述べる。本研究は、ラジオ・ドラマをもとにデータを広く収集するが、タグ表現の記述的な研究が最終目的ではなく、英語という言語でタグが成り立たせている原理の説明を目指している。データの観察だけでは、例えば、「理論的に存在しない事例」というものに遭遇しない。あるパターンが存在しない場合、それが偶然なのか、理由があるのか不明である。この穴を埋めるためには、観察を通じて仮説を立てて、その検証のために母語話者インフォマントへのインタビュー調査は不可欠である。従って、母語話者へのインタビュー調査を重視した。

４．研究成果

本研究は、話しことばの文法論の構築を目的にして、話しことばに広く観察されるタグの表現の研究である。学校文法では構文の付加物として扱われていたタグについて、独自の存在意義を持つものとして考察した。具体的には、英語のラジオドラマの分析をおこなって、四つの伝統的なタグに応答のタグを加えて、5 つのタグ表現について考察した。

英語の spoken language に観察される様々なタグの形式について、対話モデルを作成して、その対話モデルで構成されたオンラインの学習教材を作成した。申請書に書いたように、この教材は教員免許更新講習等で利用する予定である。また、タグの研究について、研究の成果を広い読者、例えば、高校の英語教師や英語を専攻する学生、を対象に還元できるように、4 月に出版された学術書の中に収めた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

平成 27 年
①澤田茂保（2015）「話しことばと定型化」、『言語文化論叢』第 19 巻、pp.39-58、査読なし

平成 26 年
②澤田茂保（2014）「話しことばにおける状況省略 ―spoken language の欠落性の諸相―」、『言語文化論叢』第 18 巻、pp.37-74、査読なし

〔図書〕（計 1 件）
澤田茂保（2016)『言葉の実際 I　話しことばの構造』(シリーズ: 英文法を解き明かす、現代英語の文法と語法 第 9 巻)、研究社、P. 1-219
（本研究については、同書第 2 章に収めた）

６．研究組織
(1)研究代表者
澤田　茂保（SAWADA SHIGEYASU)
金沢大学・外国語教育研究センター・教授
　研究者番号：00196320